

小説比翼文

高木 元

【解題】

曲亭馬琴は本名滝沢興邦、後に解と改める。通称清右衛門、別号著作堂主人等（「滝沢馬琴」という呼び方は正しくない）。明和四年（一七六七）生れ、嘉永元年（一八四八）歿、享年八十二歳。江戸読本作者の第一人者である。早くから伝記研究が進み、現存する日記や書簡の大部分は活字化されて容易に見られるようになつた。伝記については既に何回となく紹介されているので、ここでは触れないことにする。

さて、伝記資料に比べて著作の紹介はひどく遅れている。馬琴が残した作品は膨大な量にのぼるが、隨筆類に比較的多くの翻刻が見られる以外、その代表作にすら信頼できる活字本が少ない。それでも明治期の叢書類には多くの作品が収められていたが、残念なことに現在では極めて入手が困難になつてしまつた。しかも明治期の翻刻は読み物として出されたもので、挿絵を欠いたり後刷本を底本とするなど、テキストとして満足に使用できないのである。本書に収めた『小説比翼文』（以下『比翼文』）も續帝國文庫『名家短編傑作集』（明治三十六年、博文館）に収められていたのだが、挿絵を欠いており、やはり校訂にも問題がある。ただし挿絵だけは『北齋讀本插繪集成』第一巻（美術出版社）に収められている。

ところで馬琴読本の処女作である中本型読本『高尾船字文』（寛政八年）は、『水滸伝』や『焚椒錄』、更には『今古奇觀』第三話「膝大尹鬼断家私」（訓点本『小説奇言』巻三）などの中国小説を、わが国の演劇である先代萩の世界（『伊達競阿国戯場』）に付会した作品。しかし巻末で予告された後編『水滸累談子』が出版されていないことからも分かるように、評判はあまり芳しいものではなかつた。八年後の享和四年心機一転して二作の中本型読本を刊行した。その一つが『比翼文』で、もう一つが『曲亭伝奇花叙兒』（以下『花叙兒』）である。その『花叙兒』は、徳田武氏が『曲亭伝奇花叙兒』論（『日本近世小説と中国小説』、青裳堂書店）で明らかにされたように、中国の伝奇『笠翁伝奇十種曲』中の「玉搔頭」を淨瑠璃風に翻案して、中国伝奇の台本に擬した様式で書いた作品である。袋や見返しに「一名彼我合奏曲」と標榜し、題名に「伝奇」という言葉を冠しているように、中国の戯曲を日本の演劇に付会するという斬新な試みを行つた作品である。一方『比翼文』の方では題名に「小説」という言葉を用いている。実は、この「伝奇」と「小説」という二語は当時の日本にあつては異国情緒に富んだ耳慣れないと謂うのであつた。だから題名の付け方を見ただけでも、読本という新しいジャンルに対する馬琴のただならぬ意気込みが読み取れるのである。

さて『比翼文』の中国典拠として、『醒世恒言』第八「喬太守亂点鴛鴦譜」（訓点本『小説精言』巻二）が指摘されている（麻生磯次『江戸文学と中国文学』、三省堂）。だが、ここから利用したのは女装した美少年が美女と契りを結ぶという部分的な趣向に過ぎない。むしろ中心は淨瑠璃『驪山比翼塚』（安永八年）や実録『比翼塚物語』（写本）、さらに容揚黛の中本型読本『敵討連

理橋』（安永十年）等さまざまな形で流布していた小紫権八譚である。これら実録の小紫権八譚を換骨奪胎して、『比翼文』全体の枠組みとしているのである。既に内田保廣氏が「馬琴と権八小紫」（『近世文藝』二十九号）で詳細に分析されているように、『比翼文』では実録の約束に従いながらも権八の〈悪〉を薄め、その庇護者である幡隨院長兵衛を〈侠客〉として形象化している。つまり馬琴は、この改変によつて道義性を強調したのである。とは言つても表面的な勸善懲惡臭は、後年の馬琴読本に比べればずつと希薄である。

一方、水野稔氏は「馬琴の短編合巻」（『江戸小説叢』、中央公論社）で、浮世草子『風流曲三昧線』巻四、五（宝永三年）と読本『西山物語』太万の巻（明和五年）とを、『比翼文』の全体の構想に関わる典拠として挙げられている。『風流曲三昧線』に拠つて権八と濃紫との因縁の伏線を設定し、『西山物語』に拠つて両家の葛藤の発端として武芸試合を設定したのであった。

ところで読本では作中人物達の関係に前生の因縁を設定し、その宿世に拠つて筋の進行を合理化するところが多い。すなわち〈因果応報〉と呼ばれている方法である。馬琴の場合は、後に益々この傾向が強くなり馬琴読本の顯著な特徴の一つになるのだが、既に『比翼文』に、おいてその萌芽が見られる。すなわち権八と濃紫の前生を権八の父が撃ち取つた雌雄の雉子であつたとすることにより、この二人が現世では夫婦として添い遂げられないように設定したのである。そして、このような仏教思想を借用した因果律は、以後の読本の構想法として作者と読者との間に於ける暗黙の約束事となつたのである。

さて馬琴は『比翼文』の自叙でも言及しているように、美少年の持つ妖しい美や男色に対し興味を持っていたようだ。享和元年の黄表紙『絵本報讐録』（敢えて玉亭主人と署名）で男色ものを手掛けているし、後年、未完の長編読本『近世説美少年録』九編（文政十一～弘化四年、四編以下は『玉石童子訓』と改題）では善惡二人の美少年を主人公としているのである。それでも公式的な発言では、男色に対して露骨な嫌惡の念を説いている。

このように『比翼文』は、以後の馬琴読本に於て自覚的に方法化される多くの要素を孕んでおり、馬琴読本の出発点として重要な位置を占める作品であるといふことができよう。

【書誌】

- 底本 国立国会図書館蔵（二一〇八・一四二）
- 編成 中本 二巻二冊
- 表紙 利休鼠無地（十九×十三・〇匁）
- 題簽 左肩 子持杵 「守節雉」 小説比翼文 上（下）
- 見返 右に「小説比翼文」左に「曲亭馬琴子編」中央下に「書肆仙鶴堂梓「印」」
- 自叙 「小説比翼文自叙「印」」末に「曲亭馬琴子「蓑笠隱居「印」」
- 目録 「守節雉」 小説比翼文總目録
- 口絵 二図（二丁）第一図右下に「北齋辰政画」とある。
- 内題 「小説比翼文上（下）巻」下に「東都 曲亭馬琴著編」

板心 「小説ひよく文上（下） ○丁付」

挿絵 十五図（墨刷りのみ）

尾題 「小説比翼文下巻畢」

構成 〈上巻〉見返し、自叙六丁、目録二丁、口絵一丁、本文二十五丁、計三十三丁。

〈下巻〉本文三一十二丁、刊記半丁、計三十三丁。丁付は「三十四」～「六十五終」

匡郭 十五・三×十一・二糸

行数 自叙・本文共 九行

表記 句点読点の区別なく「。」が用いられ、ほぼ総ルビ。

刊記 「享和四年歳宿甲子吉日兌行／江戸本町條通油町／櫻鶴堂 鶴屋喜右衛門 梓」

広告 刊記右に「曲亭主人新編」として四作の作品が挙げてある

印記 上巻一丁表、上部に「大」（大惣の印）

伝来 大惣本

備考 上巻題簽右側に、大惣のものと思われる題簽が剥離した跡がある。尚、底本の虫損部分については天理図書館本を参照させていただいた。この天理本は濃標色無地表紙で題簽欠。また、立命館アートリーサーセンターの林美一コレクション中に後印一本が存。なお、改題後印本として『遊君操連理餅花』、丁卯、仙鶴堂版がある。

【凡例】

- 一 原則的に原本通りに翻刻したが、以下の諸点に手を加えた。
 - 一 一 JIS外漢字については可能な限り異体字で表記した。
 - 一 片仮名は特に片仮名の意識で使われていると思われるもの以外は平仮名に直した。
 - 一 右に拘わらず、助詞の「は」に「ハ」が用いられている場合は、これを残した。
 - 一 「叙」に使用されている句読点（白ゴマ点）は、読点と句点とに直した。
 - 一 本文には句読点の区別なく句点が用いられているが、読点と句点とに区別した。
 - 一 衍字や欠字、表記上の誤りと思われる箇所は「」で示した。
 - 一 各丁の区切りに「印を付し、裏には丁付を示した。

【表紙】

外題 「小説比翼文 上（下）」

【見返】

小説比翼文

曲書肆仙鶴堂梓「鶴」

亭馬琴子編

【自序】

小説比翼文自叙「出思」

享和三年弥生も半過るころ、杜鵑鳴たつ春の青山のあなたなる、めぐろの不動尊にまゐれり。此地ハいにしへ、牧のあら駒出せしより、驪の名ハ有けるを、今ハ目黒と書をもて、後人附會の説をなすとかや。なほこゝかしこうかれありく程に、永き日あしもかたぶきて、ものほしうなりぬ。こゝにうたかたの栗もち鬻家あり。是なん此あたりにハ名たゝるものから、やがてその家に立よるに、餅は今饗侍る。少刻」待せ給へといふ。さらバ憩て道の勞れをもはらすべし。とく搗てよといひつゝ枕して目睡ぬ。夢ごゝろに道の程五六町立出て見れば、竹垣あやしく締捨たる菴あり。庭の遅桜咲みだれし、木の間たち潛く。鳥の声く。うき世の外の春に住馴けん人の羨しく、暫し垣間見おれば、うちより一八ばかりの女の、そのさま唯妍に、紫のいろ濃衣被たるが立出て誰そと問。おのれしかゞるもの也と名告に、扱ハとし頃聞及ぬる風流士にておはせ。主人も友ほしく思ふ折にし」¹あれバ、こなたへ入らせ給へと伴ひぬ。坐敷ハ席四ひらばかり設、竹の柱は朽て馬峰柵を得、軒端の簷すゝけて燕巣を失ふ。あるじハかかる律屋に似げなき美少年也けり。深山の雪の消やらぬ身をかこち、くれ竹のよを捨たる人と「こ」も見えず、いかなるゆゑにや田舎には引籠居給らん。いと覚束なくこそといふに、あるじすこ主人少し恥らひたるさまして、怪み給ふもことわりなれ。おのれ聖の書にもうとく、又山水を染むものにもあらず。尊も卑も、色に耽て夏虫の身をこがし、蝸牛の家をうしなひ、遠き二道行れて、天神七代の間女體なし。是男色の根本なるよし大鑑の作者はいひける。こは槿の花の夕にしほみ、朝兒の日影またで、盛いとみじかきものから、それさへ百とせの身をはこちけん。或ハ蓮生法師が弓卒都婆、或ハ僧正坊が形見の羽團扇、兼好が命松丸をいたはり、義鑑坊が義晴にかしづくなど、この類なほ多し。漢土の鄧通ハ、文帝に愛せられて孕りともいふ。袁帝は董賢を后のごとくし、弥子瑕が食さしの桃には衛の君に涎を流させ、東坡に涙こぼ

させしハ、季節椎（りせつすい）が手がら也けり。異國（ゐこく）本朝（ほんぢやう）この戯れさかりになりゆくまゝに、伽羅（きやら）にまし
たる甚之介どのてふ狂哥（きょうか）ハ、二百年（ふぢゃんねん）前（まへ）の秀句（しゅく）なりや。しら拍子（ぱいし）のながれ二（ふた）すぢに漲（みなぎ）おちて
より、哥舞伎（かぶき）の色子（いろこ）世に賞せられしハ、竹中庄太夫（たけなかしやうたうふ）、香之介（かう）、一学（いつがく）、初太夫（はつたうふ）、伊織（いおり）。又中頃は、
小紫（こむらさき）、藤田皆之丞（とうだいっしやう）、伊藤小太夫（いとうしやうたうふ）、松嶋半弥（まつしまはんやし）、坂田小傳次（さかたしゅしに）、つゞきて市村玉柏（たまかしはく）、山本かもん、
山下龜之丞（さんげたごめいしやう）、袖崎哥流（そでさきからりゅう）、中村千弥（ちゆうむらせんやし）、岩井左源太（いのざんげんた）、中村岸之介（ちむらきしやう）、津川半太夫（つるわんたうふ）、松本重巻（まつもとじゆまき）、これ
らハ都の花といふ。よしや難波（なには）の芳沢（よしは）あやめ、浅尾十次（あさおじゅうじ）、花井あづま、鈴木辰五郎（すずきしんごろう）が舞臺兒（ぶたいこい）。
こゝろある人に見せはや津の國の、西鶴（さいかく）が發句（はつく）にも、顔見せや判官贔屓鈴木（はんがんひきすけいもん）がたと、誉（ほめ）3 け
るハ是なりとか。峯の小ざらしが、きぬくの恨みより放ける。鶲（とり）が鳴東路（なぐひひがひ）にその名聞えたる
左近右近（さこんうこん）ハ三寸五分の振袖（ふりそで）に、帶ハ蘇枋染（そふくわうそめ）の麻を組織（くみおり）にし、幅ハ二寸五分を限（かぎり）として、跡先に
総（ふさ）をつけて、四五寸むすびさげ髪ハ百會の上にて元結（もとゆい）まき立（たて）、額髪（ひたいかみ）を左右に分女（わ）がたにいでた
つ時ハ、白き手拭（てぬぐ）を眉の上に被て、是を後（うしろ）にて合せ、赤繪の扇（あかゑ）をさし挿頭（さしふし）て、おもしろの海道下
りや。筆にかく共及（おなは）じといふ哥（あに）一ツを、二三年ならひて太夫と呼れ、小栗の清水の段、桶と
柄杓（ひさく）を肩（かた）にかけ、照手の姫（ひめ）を狂言（きょうげん）のはじめとせしよし、古老のいひ傳（ひづけ）へ侍る。これらを今
世の色子（いろこ）にくらぶれバ、花の傍なる深山木なるべけれど、その頃此いろの行れしこと、今に
勝たるこそいとあやしく侍れ。おのれも兄（あに）としたのめる人なきにあらねど、一たび妓女の色に
染しより、その人としも遠くなりて、かゝるわび人とハなりぬといふ。又彼女のいへりける
ハ、さなぎにも女ハ五障（ごじょう）のつみふかきに、宿（よし）あそびとなりぬる身こそ、なほあさましくも悲
く侍れ。そが中に傾色（けいしょく）に名高きハ、葛城定家（くずはだいじやう）、そのゝち京によしの。江（え）4 戸に勝山、大阪に
利生（りじょう）とて、才一藝をむねとして和哥の道にこゝろをよせ、印籠中着の緒じめに珊瑚琥珀（さんぱく）をえ
らみ、太夫と呼れながら後帶にして、四ツ折の半帶（はんし）をふところ紙（かみ）とし、茶の湯十種香（ちやゆじゅうしゅこう）を嗜み、
琴三絃（ことさみせん）を攬ならし、こゝを通る熊野道者、手にもつたも郴の葉、笠にさいたもなぎの葉といふ
哥（あに）を弾（ひき）そめて、これを郴（なぎ）と名づけしを、後に投節（なげし）とあらためて、籠の鳥かやうらめしやと
いふ唱哥（きょうか）を箕山（きざん）が作出せしより、此一ふし都鄙（とひ）に傳て、堺の隆達か妙音（めうおん）にハ、田舎人の耳を
驚（おどろか）し、「東國（あづま）にハやへ梅（うめ）といふ新曲（しんきょく）行（おこな）れ、又土手（どて）手（て）ぶしてふ小哥（こくわい）も是より出て、英何（ひやうなに）がしが
作もありとぞ聞え侍る。されば中ごろまで太夫道中するときハ、秃（かぶる）一人に三絃（さんせん）もたせて、前に

立せけるも、此等の余波とぞしらる。扱よしなき昔語して、釈迦の御まへに経を説こゝちし
給ひけん。君が年々の冊子、たえず両夜のつれぐを慰侍る。この頃ハいかなることをか綴り
給へる。聞まほしといふ。やつがれこの物語を聞いて、膝の席にすゝむを覚ず。やがて懷より
一巻の冊子をとり出でいへらく、おのれ才みじかけられ、めづらかなる筆すざみも待す。此さ
うしへ、」₅ 往年何がしが筆に著してより、としごとに哥舞伎狂言にすといふ。平井、幡隨
が吏書るもの也。こゝろにとむべきものならねど、閑居の伽にもやと、打ひらきてさし置バ、
かのたらまらなやま 他人忽地惱しげに見ゆ。こへいかなるゆゑにか、これらのこととハ是給ふると間に、あるじ
の少年つと立あがりて、君もしわれくが名をしらんとならば、行てかしこの塚を見給へと
いふ。声いまだ訖らす、風さと吹來る程こそあれ、今まで在ける人ハ見えす。頂の上に家も
崩るゝごとき音するに怕れて、一声あと叫んとするとき驚寤ぬ。是南柯の一夢也けり。往昔
唐の開元七年、處士廬生てふ人、邯鄲に旅やどりして呂翁が枕を枕とし、五十年の榮枯を夢み
しこと、沈既濟が枕中記に見えたり。わか夢それにハ冥にしあれと、彼も我も寤るに粟の蒸る
をまたず。嗚乎前身といふべきや。はた後身といふべきや。今又呂翁を見るこことなし。つひに
身を側て起あがらんとすれば、比翼塚のほとり堆子しきりに鳴て、春の日やうやく西に没ぬ。

【目録】

守節雉しゆせきしゆ 小說比翼文總目録

第一編
恋主狗れんしゆく

第二編
犬兒恩感けんじおんをかんじてじよちしにつかひする
竊士野鶏射禍遺吏ふとようにきうしめいをかたる

浮屠小兒相命談吏ホリシ

第三編
寶劍典ほうけんてん 右内祿讓吏うないろくをゆづる

平井本所閑劍法吏ひらゐほんじょたちあはせのひらゐほんじよみよしづかの
吾妻森三四白家吏あづまのもりみよしづかの

蓑笠隱居【印(著作堂)】

曲亭馬琴子

6

第四編 権八、怒助、太夫、殺吏

「ごんぱく あくすけ たいふ さつし」

第五編 審家、過助、市仇、養叟

「しんか くわすけ いちしゆ なうしゆ」

第六編 鈴森長兵衛、行客、救叟

「すずのもり ながひょう ぎやく きゅうしゆ」

第七編 假女子身典、濃紫挑叟

「かじよしみをうりて こじよしきをうりとむ」

第八編 幢隨黑夜義弟、試叟

「ぱんずすいへやぎでいをこころむ」

男女死決、淺茅奔叟

「つまつてきをたつさへあんにわざはねにあふる」

第九編 妻棄妓、鴆、暗殃、遭叟

「つまつてきをたつさへあんにわざはねにあふる」

第十編 両墳石合、比翼、名叟

「りょうづんせきあいわく ひよく なみしゆ」

口絵

小説比翼文總目録畢」⁷

比良井權八

北齋辰政画

雄児任氣使聲蓋少年場

「ゆうぢじんきのしなはおほしゃうねんじやう」

劍仗嫖院過人殺都市傍

「けんをつきひやういんをよせりひとをころすとしのかたはら」

妓女濃紫

「ぎじよこひよざき」

當年紫稱妖狐怪

「とうねんしそうすようづのけいふく」

三德不空身貞死」⁸

「さんとくむなからずみでいにしす」

【本文】

小説比翼文上巻

東都 曲亭馬琴著編

第一編 窮士雉子を射て禍をのこす叟

附 浮屠小兒を相して命を談る叟

むかし武藏國、葛飾郡、平井村の郷士に、平井右内といふものあり。その先祖をたづねる里見義弘につかへしが、義弘滅亡のゝち故郷平井村に隠居し、軍学釤術を教て生計とせり。今之右内に至りても、父祖の業をうけつぎて釤法を指南す。右内その人となり廉直にしてへつらはず、こゝをもて技ハ長たりといへども門人すくなく、その家極めて貧窮なり。年わかゝりし時猶をこのみで野にあそぶ。一日雉子をうちてその首に中たりしが、その首飛て雉のうちにや入けん、これを索るに見えず。明日又おなじ野にてその雌鳥をうちとめけり。此雉子、きのふうちたりし雄鳥の首を羽がひの下にかくしもてり。右内これを見て大に慚愧し、夫雉ハ守節の鳥なり。嗚乎飛禽もなほ、夫婦いもせの恩愛斯深を、⁹人としてなすこともなく、生るを殺してたのしみとせんこと、積惠餘殃の天理、おそるべし慎べしと忽地感悟して終に殺生^{せつしよう}をやめたりける。又おなじ郡なりける本所の里に、本所助太夫といふものあり。これもその先祖ハ平井氏より出て、右内が親族なり。彼が父祖ハ總州の千葉守胤の家臣なりしが、石原の城没落のゝち、これも本所の郷に來りて釤術を指南し、今之助太夫に至りて既に三代の郷士なり。抑制太夫、その人となり奸佞邪智にして世才あり。こゝをもてその技ハ右内に劣りたれども世人彼が^{かれ}【挿絵二】¹⁰佞辨に迷されて、その門下に属する人多かりければ、年わかきより用られて、家ゆたかに時めきけり。助太夫が才助市ハ、その性質兄に似ず。右内ハ釤術に達したるのみならず、筆法ハ佐々木文山に学て、手迹拙からざれバ、助市幼きより右内に筆学して、父の^ちごとく敬ひければ、右内もかねて助太夫が奸佞をにくむといへども、助市が老実なるにめで、一家の好をやふらず。右内に子二人あり。兄を権八といひ、妹をおつまとよぶ。その身村落に生るゝといへども顔色玉の^{おんしょくたま}泥¹¹中の芙蓉ともいふべし。その頃右

内が妻の従才なりける男に、西村保平といふ浪人あり。目黒瀧泉寺の門前に、かすかなる家居して夫婦住けり。としごろ子のなきことを歎き、宝塔寺の雉子の宮に祈りて「ひとりむすめけ、その名をおきじと呼て鍾愛たぐひなし。女兒きじ四ツになりける春、母持病の積聚を患て身まかりぬ。保平鰐の身一ツに、おさな子を養育して艱難いふべうもあらず。右内このことを傳へ聞てある日保平が許ゆきていへらく、足下の不幸きくも」【挿絵二】¹² いたはし、男の手して稚きをもり育んこと、よろづに附て憂かるべし。しり給ふことくわが家極めてまづしといへども、足下の艱難見るに忍ず。けふよりおきじを引とりて養育し、ひとつなるのゝちハ孩児權八に妻すへし。このことわれに任さるべきやといふ。保平これを聞て大によろこび、げにや一貴一賤まじはりを見るといへど、貧に居て貧を辞せず、窮して後人の信をしるとハ、足下の事なりかし。とまれかくまれよきにはからひ給はるべしといふ。こゝに於て右内ハその日おきじを抱きて家に帰り、夫婦これをいつくしむこと実の子のごとくす。おきじハ權八に年一ツましたりければ、よろづおとなびたり。されど過世あしくやありけん。只管權八と陸しからで、はしたなく挑あらそひければ、父母もけうときことにハ思ひながら、互に年つもらばはぢて争ひもやむべしと、只仮初に諭しいましめけるが、既に三とせの春たちて、身丈ハわか草の崩いづるごとく伸れども、あらそひ高いよ／＼つのるばかり也。ある時右内權八おきじを招きよせ、世の諺に、人の中あしきを犬と猿に譬たるハ、犬ハ人家を慕¹³猿ハ山林をしたひて、そのなすところ異なれば也。御身ふたりハしからず。為ところもひとしく、遊ぶことも同くて、むつましからぬへいかにぞや。稚ごゝろにもよく弁へよ。きじハゆく／＼權八が妻とせよと苦ぐしく教訓す。二人ハかほうちあかめつ、手を膝におきて、父うへゆるさせ給へ。かさねてハ諍ふまじといふ。父母よろこびてやゝ心をやすくせしが、その次の日もあらそふこと常にかはらず。右内ハ興さめて口を鉗、そのゝちハ敢是非をいはざりける。權八七ツになりける春庭の小鳥を射んと、破魔弓に箭をつがひて睨む所におきじ何こゝろなく障子をさとひらきて走りいづれハ鳥ハこの音におどろきて飛去ぬ。權八大に怒りてなんぢよくもわが射る

妨せしな。當知よといひつゝよつ引牒とはなつ。その箭おきじが額をかすり、障子をつらぬきて席薦のうへにすつくと立ッ。おきじハ¹⁴ 一声噫と叫びて、忽地はたと倒伏たるその音におどろき、一親走り出てこれをみるに、おきじが額やぶれて血流れ出ること夥し。あはやと抱きおこし、袖もてその鮮血をぬぐひ見れバ、只破广矢のかすりたるのみなるゆゑ、幸ひ疵も深からず。やがて膏藥を傳、湯剤を飲せ、さまぐ勵りければ、十日ばかりにしてまつたく愈り右内ハこの光景にうち驚きて、とせんかくせんとこゝろのうち安からず。婦さゝやきていへらく、世に五生々尅といふことなきにしもあらじ。つらゝかれら「一人が冥を思ふ」【挿絵三】¹⁵に、是かり初のことにはあらず。近きわたりに宮居し給ふ、平井觀喜天の庵主ハ、ト筮説相の術に通じて、よく人の禍福をしめし給ふときく。はやくこれを迎てその吉凶を問給へと薦けれバ、右内げにもとこゝろづき、翌日觀喜天の庵主を請じて子供等が姻縁の吉凶を問バ、庵主すなはち相して云、男子ハ子の年戌の日に生れて金性なり又女子ハ亥の年午の日に生れて火性なり。夫火ハ金を尅し又火ハ戌に衰ふ子ハ正北にして陰なり。これを四神に配すれば、北方玄武水に象る。¹⁶ 午ハ正南にして陽なり。これを四神に配すれば、南方朱雀火に表る。陰陽歎して水ハ火を尅す。これを妻^{〔せ〕}んこと大によからず。その氣こゝに牙して相あらそふといへども、後ハ却て睦しかるべし。譬バ金ハ火に尅せられながら、銅鉄鏡鉋のたぐひ、みな火に入りてかたちをなすがごとしその惡ものをもて形をなすがゆゑに、これを妻すときハ睦して迭に相殺すをしらずその事成におこりて南方に終らん歟。この禍一朝の事にあらず足トわかつりし時大に陰徳をそこなへりその餘殃今この小児に」懼りぬ。よく心に秘して徳を修し、その禍を禳べしと、過去を説、未來を示こと響のものに應するごとくなれば、右内夫婦大におどろきて、厚く庵主に礼謝し、つらく禍の係るところを考れバ、むかし雌雄の雉子をころせしこと、まつたく子供等が身にむくへり。彼が名をお雉子といひ、生るゝ日又走せて禍を遺し、幽王の時にいたりて、褒姒が為に國をほろぼすとかや。今のおきじハわが家^{〔17〕}褒姒ならんと、舌をまきておそれしが、女児おつまも又雉子の後身にして、その終ところかの雄雉のうたれし」とくなるを、しらざること淺ましけれ。斯て右内ハ次の日おきじを

伴て目黒にいたり、保平にあひていへりけるハ、かねてハおきしを養て嫁にもせまほしく思ひしが、いかにせんわが家ますく貧に迫り、四人の口を糊しがたし。よりて已ことを得ずかへし申スなりといふ。保平これを聞いて心のうち大に憤り、さては右内わが貧窮をあなどり、ゆく末たのみ少しど、中途に女児をかへすならん。渠武夫ににげなくも言」を食て、われを辱ることのにくさよと、吳儀なくおきじをうけとり、是より交を絶て永く胡越の人となりぬ

第二編
犬児因を感じて情子に使する貳
并宝釦を典として右内禄を譲事

光陰箭のごとく、又梭のごとく、権八已に十六才になりぬ。その容貌の美なるをいはゞ、鄧通もおよびがたく、在五もなずらふべし。面ハ紅粉を施さずして桃花の如く、腰ハ羅綺にもたへずして嬌姪に似たり。かゝる美少年は、俳優中の女形といふものにもあらじと、その男色になづ」¹⁸ める人も多かりける。権八斯のごとく容姿女子に彷彿たりといへとも。心あくまで猛して万夫をもおそれず。釿術ハ父が技をうけつぎて、金石を碎くの手段あり。實に今の世の牛若丸ともいひつべし。妹おつまハ今茲十五歳にして、これ又沈魚落鴈のすがたあること兄権八に劣らず。是より先本所助太夫が才助市、おきなきより日々手習にかよひ來しが、子ども遊びの雛戸より、仮初に妻定して、

何となく硯にむかふ手ならひよ人にいふべきこゝろならねバ

と、源氏の古哥を口すさみしより、初花の色こき、春の夜の品定めにも、綻かゝる口あけの、袂にあまるおもひとなりて、互にゆく末ハこの人ならすして、誰にか百年の身をまかすへきと、心のうちにゆるせしも可愛し。年長てハ助市も手習ふことをやめて、こゝに來ることも稀なりければ、今ハ石原のかたき契もたのみがたく、吾妻の森の下露に濡つゝ袖も朽んとす。こゝに右内が家にとしごろ養ける犬あり。この犬黒き毛のうちに、白き毛三ツと四ツと絞染のごとくまじりたれバ、その名を三四白とよべり。ある日おつまハ椽の柱にうちもたれて、ひとり助市が事を思ひなやみ」¹⁹ 居たりしが、かの三四白はしり来て、尾を揮つゝ求食けり。おつま犬にむかひていへりけるハ、むかし吳の陸機ハ、その身京洛にありながら、故郷にたよりせまほしき折からハ、養犬に書をよせて、万里の安否をしるとかや。なんぢもしこゝろあらば

わか思ふ人に使せんやと戯れけれハ、此犬そのことを聞わきたるがごとく、走りよりて一声三声吼たりける。さてはわが為に媒するにやと嬉くて、まづこゝろみに艶簡さら／＼とかいしたゝめ、これを竹の筒にいれて犬の首にかくれバ、犬ハそのまま走り去ぬ。嬉さ」【挿絵四】

「²⁰」いはんかたもなく、又こゝろづけ巴こはげだちて、所も去ずそのおとづれをまち居たるに、少刻ありて犬ハ走り帰りぬ。筒をひらきてうちを見れハ、助市が回簡ありて、此程のおこたり思ふかぎりを書つけたり。しばしハこゝろを慰る物から、戀しさハ弥まして、是より日ごとに犬に書をよせてかたみに情を運せける。さればおつまハおのれか食を分て犬にあたへこれをいつくしむこと子のとくすれハ、犬もまたお妻を慕て片時もかげみをはなるゝことなし。後にハ人も疑ひて、おつまハ犬に魅られしといひしとなん。此年の「の」²¹秋、右内が妻仮初のいたつきよりやゝ重りて今ハたのみすくなし。只人參と熊膽のちからならずして功を奏しがたしと、医師も眉をひそめてつぶやけバ、右内あるかぎりの衣服雜具を售竭して薬の代になすといへ共、そのころハ人參の價いと貴くて、後にハ代かゆべきものもなく、手をつかねて死をまつばかり也。助市このことを傳へ聞、圓金十両もて來ていへりけるハ、おのれ幼少ち師才の因ありながら、兄にまかせたる身にしあれバ、萬事こゝろに任せす。少きを厭ひ給はずハ、薬の代ともなし給へといひて、かの金をあたへける。右内もそのこゝろざしを感じながら、いはれなく人に物をうくべきやうなしと、再三再四辭しけれども、助市かたく請て止ざりければ、火急の弁利といひ、その志をやぶらんも無下に頑なるに似たれバとて、やがてその金をもて薬をもちひけり。そのゝちも助市をりにふれてハ心づけて勦りければ、右内も頻りに彼が厚情を感じける。されど定業かぎりありけん、岐扁の術もとぞきがたく、九月升一日といふに右内が妻むなしくなりぬ。右内かなげきハさらなり。一人の子等が悲みいうべうもあらず。」²²過七の追薦をはりてのち、右内つらゝおもふやう、この身貧に迫るといへども、ゆゑなくして人より物を得たることなし。助市が厚志默止がたくて、一旦金をバ借待たれども、その金ハ助太夫が手より出たるなるべし。梁ハ輕薄の僕人なれば、もしこれをかへざる時ハ、終に耻をうくべしと、思慮して、その夜助太夫が家にゆきていへらく、日外荊婦が病中に、賢才助市圓金十両をめぐまれたり。疾にも返し納んとハ思ひながら、しり給ふごとく貯

うすけれども、心ならずうち過ぬ。是ハわが家の重宝、夜光丸の名劍にし、身にもかえがたき宝なれども、しばらく足下にあづくべし。金子調達のうへハ吳儀なくかへし給はるべしといひつゝ、鎌倉純子のやゝ破れたる袋より、かの一腰をとり出して、是を助太夫が前にさしあきけれバ、助太夫思ひがけざるさまにて、こハ更あらためたる言を聞ものかな。一家のよしみ、心のおよばんたけハ調べきを、後をあはれむの餘力なきゆゑに、心の外にうち過ぬ。元來わがしれることにもあらず。小才が深き慮ありて金を巴まらせたるならんに、いかでか宝鋤を預るべきやと、口ハ蜜にして腹に針あるがごとき言なる」²³を、右内はやくも猜していへらく、この夜光丸ハ、先祖保昌よりわが家に傳たれども足下も又武智丸の係嗣にして共に平井の遮流也。他人に委るにあらず。足下にあづけおくときハわが家にあるにおなし。物を得て報ふことなきハわがこゝろにあらず。ひらにおさめ給へといふに、助太夫心のうち潛によろこび、しからば暫時その言にしたかふべしと、かの宝鋤をあつかりければ、右内ハやがて平井村へ帰ぬ。この時天下昌平に帰し、文武隆に行れて、一藝の士ハみな禄を得るをりなりければ、奥羽の知州右内」【挿絵五】²⁴助太夫が擊鋤に達したることを聞し召れ、かれら二人に太刀合させて、孰にもあれ勝たるかたを召かへよと遙々実檢の使者をさし越給ふ。権八これを聞いて大によろこび、わが父助太夫を打ふせ給はんこと疑ひなしとさゞめきけり。右内も家をおこさんこと此时にありと、もつはらその準備して太刀合の日を待居たりしが、その夕助太夫しおびやかに右内が許來ていへらく、拋も此度の大刀合ハ足下の勝給はんこと必せり。われハ年もわからく技も未熟也。又足下ハとしも長て技も鍛煉せり。されば足下²⁵そ彼侯のめに應じ給ふらめ。こゝに歎くべきハ、われ今許多の門人あればこそゆたかに世をわたれ、太刀合に輒たらんには、才子もうとみて離るへし。しかればわれも住なれしこの地に足をとゞめがたし。わが身の恥辱高いとふにあらず。只小才助市がこといかにしても便なし。足下の子をおもひ給ふと、わが才をあはれむと、恩愛いづれかふからん。只やるせなきハ骨肉のほだし也けり。もし明日の太刀合にこゝろして給はらば、嚮にあづかりし夜光丸の宝鋤をかへし、又新にうくるところの禄をわかちて、子息権八をやしなふべし。凡男だましひもちたらんもののかゝる面おせなることをいひ出て、足下のおもひ給はん所もはづかはしけれど、肉身の愛着す

てがたくて斯のごとしと、手して涙を拭ながらよぎなきさまにかたりけり。右内もけうとき」とにハ思ひながら、元來義を守るをのこなりければ、彼に一旦の恩あるに固辞がたく、儼然としていへらく、思ひがけなきことを承るものかな。わが勝べきにも定めがたく、足下の負給はんともいふべからず。勝負ハ時の運にこそよれ、そハ足下とわがこゝろにあるべき也と」²⁶

苔こたへけれども助太夫、こゝろのうちに欺あざむき得たり「と」よろこびて、程なくわが家にかへりける。

第三編 平井本所闘劍法の叟
附 吾妻森三四白家の事

かくて太刀合の日にもなりければ、右内助太夫めしに應じて仮屋に參上す。勝負ハ午の刻と定られて、まづ長短四本の木刀をあたへ、いづれにてもこゝろに應じたるを用べしとなり。兩人おのくこれをえらみとりて休息所に退く。既に時刻にもなりぬれば、実檢の使者ししゃ 阿武隈瀬左衛門席上に立出れバ、右内助太夫袴の裾すそ高くとりつゝ、迭にやと声をかけて立むかひ。二三合打あひしが、右内が木刀鍔ばく元よりほつきと折われたり。助太夫得たりと飛とびかゝり、木刀をひらめかして擊うたんとするを、瀬左衛門声をかけて、やよまつべし。太刀折たれたるをいかでか打ん、速に木刀を更らるべしといふ。右内これを聞いて脆きていいへらく、太刀折たればわが輒まづなり。もし真鍔しんぱんならばいかにせん。かゝる所に長居せんもうしろめだしと、遂に仮屋を逃出て、おのれが家にぞかへりける。されば助太夫ハ27 労せすして勝利を得、一時に面目をほどこしこける。後に聞バ、右内休息所にありしき、竊に木刀の鍔ばく元に小刀目を入おき、折るやうに設しとなん。権八おつまハかゝることもしらざして、父の太刀合にかちて今や帰かへり來給ふと、同胞門に立出つ。頸くびを伸してそのかたをながめ居たるに、日もやゝかたぶくころ、右内ハ思ひありげなるさまして帰かへり來れり。権八うれしく走りよりて、いかにや太刀合に勝給ひつらんといふを、父ハ見むきもせず。つと裡面うちに入り、兄方じんぱうをちかく招まねきていへりけるハ、夫禍福かくなず愁うれふ。かるがゆゑに君子くんしハあらそふところなく、おのれ達せんと欲してまづ人を達す。けふわが木刀の折れたるも天なり。けふの勝利せうりハ助太夫なりと、聞もあへず権八ハ、忽地面色燃たちまちめんじよとももるがごとく、火炎くわいんの如息いのきをほとつきて、かひなき父の仰あほせことや。太刀たちをれたらばなどて、再度さうど

の勝負のぞみハ望給のぞみはざる。われ今彼所いまかしこに馳はせむかひ、父ちにかはりて勝負さうぶを決けつすべしと、刀引提けつて走はしり出いづるを、やよやまて権八まんぱ、汝なむがしるところにあらず。もし強して」²⁹ ゆかんとならバ、親子おもこの愛あいも是までぞと、声高こゑたかやかに制せいすれば、権八この一言いわごんにちからなく、拳こぶしをさすりてかしこまる。おつまは父ちの太刀合たちあはせに利りなきのみならず、助太夫みちの陸奥りくおへおもむかバ、助市とも永ながきわかれにやなりなんとその事かのこと思ふにかなしく、この夕ゆふ艶ふみ簡たんしたゝめて、三四白みよしが首くびにむすひつけ、助市のちがかたへ使つかひして思おもふかぎりをくどきける。この頃ころこの犬いぬの曳け、近隣きんりん囂ぎやう々よととり沙汰さたして、お妻つまこそ大おほに魅みられたれと、言ことばに枝えだをそえていひ傳つたれバ、一大虚いだきょを吼ほえて百犬寒けんじんを傳つたふとかや。後にハ右内のうないもこの」ことをもれ聞きて、安からぬ事かなと、それより心こころをつけて窺うかふに、げに人のいふに違たがはず、あやしきこと多かりければ、大おほに歎なげき、わが女児畜生ほんじゆうとまじはること、いかなる過世すくせの因果いんくわぞや。身みのうちの腐くされハはやくこれを断たざれば愈いえがたし。今ハちから及およばず、撃うてすんにハと、その夜弓矢手よみやばさみてこれを窺うかふ。初夜しょやすぐるころ、三四白庭みよしにはに来て、一声高ひく吼ほえけれど、お妻つま忙いそしく走はり出い、犬いぬの側そばに立たよるところを、右内のうない裡うち面おもてより贈くわ高たかく禮ひとはなつ。その矢やあやまたず、おつまが右うの袂たもとを縫ぬいて、矢やハ犬いぬの咽のど³⁰ へがはと立た、犬いぬはそのまま艶ほんじゆうれける。おつまハ噫あとはかり怕おぞれ、たち退たのんとすれども、袂箭たもとやにつらぬかれたれば、これをぶり放はなだんとするうちに、右内のうないはやくも走はり出い、弓ゆみをもて丁々ていていと打うすえ、涙なみだを瀕はら然たまと落おとしていへらく、畜生ちやうじやうに對たいしてかたるべき言ことばなし。只ただ速はやに自害じがいせよ。但たゞわが矢やさきにかくべきかと、弓ゆみも折たぶれるはかりに打う擲てきす。おつまハわがみの恨あらまつにかへす言ことばなかりしが、畜生ちやうじやうと宣あらわふ父ちの言いいはれなければ、今ハつゝまづ告げたまつ奉まつるなりとて、犬いぬに書しよをよせて助市ともと契ちぎりしこと、一五いちご一十じゅう物もの【挿繪七】³¹ かかるに、父ちハなほ疑うながひながら、犬いぬの首くびにかけたる簡たんざくをとりて見れバ、うちに助市ともが回簡へんじんありてとても陸奥りくおへおもむくべきこゝろなきよしをしるして、又いぢま一葉いぢまいの短尺たんざくをそえたり。ひらきてこれを見れバ、

むさし野にげのみにありといふなる逃水にげみの逃にげかくれても世世人を過すこすかな

と、俊頼としより朝臣あその哥あそをもて、逃出にげでよといふ謎なぞとせり。父ちはじめて疑うながひをはらし、罪つみなき三四白みよしを殺ころせしことを後悔こうわいして、披か犬あづまを吾妻あづまの森ほりに埋うめ、しるしの石いしを建て跡あらねんざ懇とぶらに吊つるひける。今もて漂板塚みよしづかとてかの地じにあり」³² とかや。

和訓わくくんおなし

この夜権八りんこうハ、隣鄉りんじょうにゆきて此時このときやうやく

立かへりければ、右内ハありしことゞも語聞せ、われ弱官の時多く殺生して徳をやぶりしに、今亦主に忠ある犬をころして、大に陰徳をそなへり。もし勉めて善根を修せんば、わが家、それ後なからんか。汝等よく鑑て陰徳を行ふべしといひて、かの助市が短冊を権八に通与、かれら斯まで思ひ詰たることなれバときを待て妻すべし。御身しばらくその短尺をあづかり置、わが思ふ程をも妹にあたり聞せよといへバ権八も、父の慈愛ふかきを感じ、且三四白が死をあはれみ、親子辞しわかれて臥房に入りぬ。

小説比翼文上巻」³³

小説比翼文下巻

東都 曲亭馬琴著編

第四編 権八怒て助太夫をころす事
并冤家を過て助市仇を養ふ事

本所助太夫が家にハ、某侯のめしに應じて、陸奥へ起行ちかきにありと、いと賑へり。才助市ハ、おのれが思ひのやるかたなくて、心中樂まず。一日兄にいひけるハ、扱も此度の太刀合に勝給ひしこと。稽古のちからとハいひながら、右内ハよく恩義をしる人なれバ、こゝろに慮りしこともあるべし。此よろこびに、かねてあづかり給ふ宝鋸を返し給へかしと薦けれども、兄ハこれを耳にも入れず、そらうそぶきて居たりける。斯て助太夫啓行の日も定りぬれハ、苗別の宴席をひらきて、親戚門人をまねきけるに、右内ハこゝちあしきとて行ず。その詰朝思ふやう、人の招きに應ぜざるさへあるに、一札を速ざるハ不遵也。行きてのふの怠りを謝すべしと、袴引かけて立出しが、やがて帰り来て只顧嘆息し、顔色常にかはりてなやましげに見えければ、権八父のまへにかしこまり、わが父何の愁有³⁴ てか、斯思ひには沈み給へる。父子の間何かつゝみ給ふべき。語聞せ給へかしといふ。右内うちうなづき、この更に於てハいはじとおもひ詰たるが、さては色にあらはれしよな。何かかくさん、けふしも助太夫が傍若無人言語に述がたし。そのゆゑハ日外老妻が病とき、助市が手より借得たる十余金を賠ん為、汝等にもふかく隠し、夜光丸の鋸を助太夫にあづけ置ぬ。しかるに助太夫ある夜來りて

いへるハ、この度の太刀合に勝利をゆづり給はらバ、宝劍をかへしあたへてこれに報べしと乞ふ。彼に「一旦の恩あれバ、白地に固辞がたく、」太刀合に負とも宝劍をとり復しなバ、先祖へ孝も立べしと、さきのごとくはからひしに、彼言を食て更に鉄をかへさせられバ、われこの事をいひ出てその約にそむきしを責けるに、彼却て大に怒てわれを犬侍と罵る。その夏ハ三四白が虚説より出て、子ハ畜生とまじはり、親ハ犬を射る。犬母ハ鱗を生ず、父子ともに犬なりと欺けり。われもさすがに忍がたく、討て捨んとハ思ひしが、汝等が路頭に迷ふことの不便さに、無念をこらへけるハと、聞もあへず権八つと立あがり、父ハ堪忍もし給はんが、われハ得こら³⁵へ難し。これをも忍ぶべくハ何かしのばざらんやとひとりごちて、刀を跨み走出るを、父ハ追縋^{おひすがふ}てとゞむれども、はやその影をたに見ず。権八ハ足に信て助太夫が家に走り行、案内もせず裡面^{うち}に入れバ、折ふし助太夫ハ甲陽軍鑑^{こうようぐんかん}をよみながら、盲法師^{まんぱ}に肩癆^{けんへき}うたせ居たり。権八はこれを見るよりその前にむずと坐し、忽地銀海^{たちまことか}を見ひらき、朱唇^{しゆしん}を翻^{ひるか}し、声をあららげていへらく、你嚮^{なむぢ}にわが父を犬侍と罵る。夫人を誑て太刀合に勝利を得、約にそむきて宝劍^{ほうけん}をかへさざるものも、是亦人面獸^{じんめんじゆ}」【挿絵八】³⁶心なり。犬侍の児の腰刀、切れるやきれざるや、當にしるべしといひながら、抜手も見せず助太夫を只一刀に切伏たり。次の廂に居合せたりける門人五六輩^{はい}、これをみて大におどろき、師匠の仇人逃さじと抜つれて立むかふを、権八ものゝかず共せず、右にあたり左に挂へ、立地に二人を砍殺し、三人に手負せければ、血ハ流れ紅河をなし、甘谷に錦をさらし、龍田に楓をちらすがごとし。権八遂に納戸をかいざぐりて彼夜光丸^{かのやくわうまる}をとり出し、是ハわが家の宝劍なれば今持かへるぞと呼り外面にはしり出るに、³⁷家僕等その剛勢に辟易^{ひきよひ}し、あへて挂るものなし。此时助市ハ家に在合せず、奴僕^{しもぶ}がしらせに打おどろき、後ればせに立かへり、この光景を見て或ハ歎き、或ハ怒り、直に右内が家に走り行ていへらく、意趣^{みしゆ}ハしらずといへ共^に権八ハ兄の仇人なり。速に出さるべしといひつゝ、はや鎧^{つぱくら}元くつろげてぞ扣たる。右内驚^{おどろ}くけしきもなく、兄の仇を復んハ武夫の道なり。いかにわが児を遁^のとすをへし。心のまゝにせらるべしといひながら、紙門押ひらきて引出すを見れば、権八にハあらずしてお妻をきびしく縛めたり。助市眉^{まゆ}をひそめ、あなうたてし。右内ちまよひ給ひしか。吾女子^{われをなご}をうちて何かせんといふ。時に右内寛^{くわんじ}尔として云、助市よくわが言を聞れ

よ。権八僅十六才にして、鉄法の一流を極たる助太夫を討て立退ほどなれば、などて鈍くも家に隠れ居て、足下の来るを待んや。渠ハ法を犯したるものなればわが児にあらず。天地のあらんかぎりハ探索て宿志を遂らるべし。わが子ハ此女児のみ也。足下とわけあることしらざるにはあらず。われ権八を隠しおかざる證には、この女児をまるらす」³⁸ べし。心まかせにはからはれよといふ。助市呵々と打わらひ、われ息女と仮初の契ハあれど、今かく冤を締うへハ、争か私の情に羈れて、ふたゝびこれをかへりみんや。さしも権八を助さに、色をもて欺「か」んとハ、武夫にげなき穢^きこゝろかなといふ。右内これを聞いて小膝立なほし、こハ舌長し助市。われいかにぞ色をもて欺くべき。抑^{そらへ}権八助太夫を切害せしと風聞あるより、お妻おのれと迫りて自殺せんとせしゆゑに、われこれを縛^{いしましめ}おけり。よりて女児を足下に委んといふこと、実ハ足^{じつ}下に権八を討せん為の寸志^{すんし}なりといふ。助市いよ／＼疑ひ惑て、その故を問バ右内いへらく、さればとよ。権八年少けれども少しく思慮あり。足下の仇を復んとするをしれバ、渠地を潜りても匿^{かく}るべし。さるを仇人の女才たるお妻を養^{まつ}おくときハ、扱ハ助市色に迷ひ、仇をむくふに心なしと、彼みづから意をゆるさバ、労せずして宿志を遂なん。怨を雪ての後ハ、むすめを足下の婦とせんとも、又せまじとも、こゝろのまゝなるべしといふ。その言ことゞく理ありけれども、助市忽地こゝ」³⁹ ろ解て大によろこび、げにや庵を擊^うものハ陥を設け、贋^{まう}を捕^{つか}ものは囮^{おとり}をおく。謹て教にしたがふへし。假令権八翅^{つばさ}ありて天に昇り、鱗^{うろこ}ありて水に没^{いる}とも、終は個のごとくならんと、明晃々たる刀を引抜^{ひきぬき}、お妻が縛^{いしましめ}を切断^{きり}バ、索^{なは}はらりと前に落^{おつ}。おつまハ父の慈悲、兄の行すゑ、又助市が心の中さへおしはかられて、左右いはん言もなく、よゝと泣て声を惜す。右内これを見て双眼に涙をうかめ、やよむすめいたくな泣^{なき}そ。是みな前世の惡業^{あくごう}ぞかし。かゝるうき世の嵐なくば、栄行春」【挿絵九】⁴⁰ の花をさせ、相生の松の千代かけて、思ふかたへも嫁らすべきに、その人としもそひハせで、兄の為に質となる。あすハ誰が身のうへや鳴らん、山がらす、頭も白くなると聞。かの燕丹がむかしながらで、老が頭に霜やおく、夢野の鹿の妻戀も、果ハその身の仇となりぬ。うたてやな。御身が帰り来る日は、これ権八が忌日なり。彼をころして悲んや。これを助けてよろこばんや。父が心のうちに推して、よく性命を保べし。噫よしなきくり言に時やうつる。涙おさめて」⁴¹

疾ゆけよ。助市めでたく帰郷をまつなりと義を見てやぶらず悲ざる、右内が一言にはげまさ
れ、助市遂にお妻を携、ひとまづ本所へかへりける

第五編 鈴が森に長兵衛行客を救事
附 假女子身を賣て濃紫を挑戸

平井権八は助太夫を討て直にその家を走り出、いづくを當と定ねど、川に添、橋をわたり、
南を望て走程に、思ず鉄炮洲まで來ぬ。既にかへらんとするに家をうしなひ、すゝまんとする
に路をしらず。」 しばらく躊躇して心決せざりしが、詰とこゝろ附ておもへらく、大丈夫當に
宇宙をもて家とすべし。いかにぞ手を束て擒とならんや。さらバ浪速の方に身をよせんと、俄
に中途にて行裝をとゝのへ、高輪に至るころ、日ハは西にかたぶきぬ。路傍の茶店に少刻足
をやすめ、こよひハ更とも河崎まで馳行んとひとりこちて立出るを、茶店の主人とぞめてい
へらく、日くれてハ鈴が杜物恩なり。少年の夜行し給はんこといかにしても危し。今夜ハ品河
に⁴² 一宿し、翌とくうち立給へかしといふ。権八冷笑て、吾ハ故ありて路を急ぐものなり。
假令野伏山客の患ありとも、わが両刀腰にあり。何の怕があるべきといひ捨て出去ける。そ
の頃淺草花川戸に任侠の名聞えたる、幡隨長兵衛といふもの、大師河原の賽、おなじ茶店に
憩居たりしが、権八が今の廣言を聞いて大に嘆美し、げにや花ハ吉野、人ハ武士とぞいふなる。
今之美少年の言、潔しく。しかハあれど、寡ハもて衆に敵しがたければ、中途山客の為にな
やまされること必せり。」 われこゝより引かへし、機に臨て彼をすくふべしと、忙しく裳を褰、
西をさしてぞ馳去ける。この頃ハ俠者おほく、六方丹前、白鞘組、大小の神祇など、おのく
その隊ありて、劇孟季布が風を慕ふもの少からず。就中この長兵衛ハ、一個の志氣ありて、柔
をたすけて剛を征し、利をすてゝ義をもつはらとする豪俠なれば、もし幡隨が名をいふときハ、
嬰児の泣をもとゞむべく、俠徒もその下風に立んことを願ひけり。斯て長兵衛ハ、只管路を急
ぎ⁴³ けるが、品河にて日ハくれぬ。松風さむくして人迹をたち、波濤岸をうちて渺々たり。已
に鈴が森に走つきて見れば、思ふに遠ず権八大勢の山客にとりまかれ、雲飛雲不飛戦居たり
しが、忽地三四人を砍仆し、威風なほ稟然たり。ふり揚る刀尖ち、光明赫奕と閃き出、闇夜
も白昼のとくなれば、長兵衛大に驚嘆し、しばらく木蔭にたゞみて、その光景を窺居た

りしが、今ハこらへかねて走出、少年助太夫するそと声をかけ、矢場に兩個の【挿絵十】
山客を切ころせば、賊ハ加勢あるを見て、四分八落に逃うせたり。権八刀を腰におさめて一札
し、何の人かハしらねども、今の危難をすくひ給はることのうれしさよといふ。長兵衛寛尔と
していへらく、聞及び給ひつらん。われハ幡隨長兵衛なり。さきに高輪の茶店にて、君がたく
ましき一言を感激し、中途に灾害あらんことを思ふてこゝに來れり。実その言にたがはず、君
が鋤法凡ならず。しかるにその刀の尖より光明かゞやきて、闇夜をてらせしことのいぶ⁴⁵
かしさよといふ。権八微笑ていへらく、疑ひ給ふもことわりなり。わが此刀ハ夜光丸と名づ
けたる所の宝鋤にして、闇夜にこれを抜ときハ、光明をはなつの奇特あり。この刀のゆゑをも
ども、すべなきことあれバこそ、夜を犯して旅ハし給ふなれ。しらぬ國に行んより、おなじく
ハ此地にとゞまり給へかし。吾ハいふかひなきものながら、義ハ鐘が渕の鐘よりも重しとし、
命は秋葉の散楓より軽しとす。身の賤きを嫌ひ給ははずハ、命にかえてもかくまふべしといふ。
権八ハかねて長兵衛が名を聞しりてければ大に歎び、遂に義を締て兄才の約をなし、二人打つ
れて鷄明のころ、花川戸に立帰りける。こゝに於て権八は助太夫を討て立退しこと、一五一
日の語けれど、長兵衛も彼が剛勇に打驚き、仇人もつ身ハ心をせめて、世をしのぶを才⁴⁶一と
すべし。本所と花川戸ハ大河一條を隔たれバ、そのまゝにてこゝにあらんこと大に危し。われ
に一ツの計ありと、それより権八に女服を被せ、面には紅粉を施し、髪ハ髢を出し⁴⁶て
島田髢とす。元來玉を欺く美少年なりければ、さながら女子に戻ならず。さればこゝにつどひ
来る侠客等、その色に泥みてさまぐ⁴⁷口説よるもの多し。長兵衛斯てハ禍を引出すべしと、あ
る日権八を三浦が許につれ行て、是ハわが姪也。思ふ仔細あればしばらく預り給はるべしとた
のむ。三浦も男子とハしらずして、その縹致高尾うす雲が下にたつべきものならねバ竊によろ
こび、是を濃紫にあづけゝる。是より権八こゝろを竭して小紫に仕ければ、小紫も又これを愛
して他事なくもてなし⁴⁸ぬ。さればにや権八ハ、小紫が容色に心うごき、あはれかゝる美人
しらせまほしく思ひながら、身の一大事に思ひかへして、若むらさきの色にも出さず、宝の山

に入ながら、手を空^{むなし}くするこゝちして、なほ貞実に仕けれバ、小紫も何となく捨がたき思ひありて、此子なくてハと鍾愛す。折ふし冬^{ふゆ}の夜の雨もにくからず、來ませし人ハ宵^よの間にかへり去て、坐敷にハ小紫と権八のみさし向ひ、わが身人のうへの品定して、少刻う⁴⁷きを慰めしが、小紫いへりけるハ、わが身花院にそだちて多くの傍輩にもまれ、遊君のかずにいりても心のあへる人もなかりしが、いかなる縁にや御身ハまことの妹よりいとをしく、又御身わらはにかしづき給はる「こ」と同胞^{はらから}も及がたし。あはれ男子^{おとこ}にして見まほしや。もしかく実ある人あらば、命も何かをしまんと聞^きよりも、権八はむね打さはぐをやゝ押しづめ、よしや戯言^{いもんご}にもせよ、さのたまはすること嬉しけれ。されどわらはもし男ならばいかでさあらん。なき物ほしとしらずして、兎^ううちあかめ、あなかしこ何の偽^{いは}あらん。御身もし殿ならハ日の本のあらふる神々かけて、百年の身をまかすべし、とばかりおもふもよしなき誓言^{せいごん}よと打わらへバ、権八今いふ諺^{ことはざ}も侍るかしと、袖^{そで}もて顔^{かほ}を覆ふも可愛^{あい}」【挿絵十一】⁴⁸し。小むらさきそのことゝハハ身を省^{かへりみ}るに違なく、さのたまふに違^{たがは}ずハ、何かつゝまんわれハもと男なり。故ありて世をしのべハ、假に女の貌^{すがた}とハなれり。あさましや君^{きみ}が色に心みだれ、この身の大事^{だいじ}をあかすうへは、今^{ことば}の言^{いふ}よも偽^{いは}ハあらじといふ。その聲音日^{ごろ}にかはりていとあら^くし。小紫ハ思ひがけざる⁴⁹一言に膽^{きも}つぶれて、胸^{むね}は板^{いたひさし}庇^{はな}はしる玉あられの^ことくなるをおし鎮め、さてハ殿にてありしよな。よし^く見かへり柳^{いこ}に花^{はな}咲とも、いひし詞^{ことば}ハたがへじと、忽地^{たらまく}小指^{さゆき}を噛切ながら、つと立て衣衝^{いこう}に掛たる白無垢^{しらむく}の袖^{そで}に遊女^{ゆうめい}二社^{たぐ}の託^{おへし}是^はなり。権八これを見て大によろこび、われハかひ好事^{こゝず}の人傳写^{だんしよ}するところの小紫が二社^{おへし}の託^{おへし}是^はなり。権八これを見て大によろこび、われハかひなき日蔭^{ひかげ}の身、假令^うき世の霜^{しも}に先だち、あしたの露^{つゆ}と消るとも、未来^{みらい}劫^{いのう}のすゑまでも、かはらじな。やよかはらじと、心の下^{した}ひも」解^{とけ}そめて、ふかきちきりとぞなれりける。

第六編
幡隨^{ばんざい}黑夜^{こくや}義^ぎ才^才をこゝろむ事^事
并^{なんによ}男女死^死を決^{けつ}して淺茅原^{はざわら}に奔^{はし}夏

かくてその年もくれてあら玉の春立^{はるたち}かへり、夏^{なつ}も過て星^{ほし}まつる頃^{ころ}より、小紫只^{ならぬ}身となりて、時ならぬ青梅^{あそびの}をこのみ、全く^{まつた}悪^{ひど}のけしきなりければ、主人ひとを以來^{もてき}ませる客にころあてありやと問せければ、さいふ覚^{おぼえ}さら^くなしといふ。あまりのふしぎさに賣^{ばい}ト者につけ

きてうらなはせければ、是ハつねに小紫が傍かたはらにある人の子」⁵⁰ なるべし。その人外陰ほかいんにして内陽うちようなり。たづねて見給へといふ。主人これを聞いてます／＼怪あやみ、それより心をつけて窺うかがへバ、かの長兵衛が姪めいなりける女いかにも疑うたがし。世にいふ半月とかいふものならめと、間なく試し見るに、是まつたく男子なんしなれバ大におどろき、もしこの事世に聞ゆる時ハ、小紫こむらさきが身に係かかりてわが活業よわぎの障さへとなるのみならず、却かへりて人にわらはるべし。只何となく彼かれを幡隨ばんずいにかへすべしと、忽地たちまちこれを追退おひしりぞけぬ。長兵衛縁故ことのわけを聞て権八に教諭きょうゆしけるハ、凡賢愚すべてけんぐとなく、身みを過はるものハ色慾しきよくなり。御身仇人かたきを持もながら、色に耽りて身の灾さいをかへりみず、もしこのゝちかゝることあらば兄才きやうさいの義ぎもそれまで也よと、嚴きびしくいましめ喰さむしける。その頃目黒こころめぐろの里に普化道者ふげどうしゃのながれを汲くみ、一節截ひとよぎりの指南しなんして世をわたる、一朗菴いちろうあんといふ桑門そうもんあり。長兵衛かねてしる人なれば、次の日権八を將よて彼所かれしょに至り、此少年故せうねんゆゑありて世よのを忍しのぶもの也よ。しばらく預あづかり給はるべしといふ。一朗菴いちろうあんも長兵衛が義氣ぎきあることをしれバ疑うたがはず、こゝろよく羨引うけひきてすなはち菴いほりに假托かとうけつ、毎夜彼所かれしょにゆきかひて、小紫と忍しのびあふ。小紫も又権八にわかれしより、魚の水にはなれしこゝちして、今ハ世の義理ぎりも何かせんとあらんかぎりの物ものハみな代しろがえて、懸こひの中宿なかやどにその人まらを待まつわび、はかなき夢ゆめをたのしみける。うつゝ心のやるせなく、いつしか冬ふゆのはじめとなりぬ。さなきにも黄金こがねハ得えがたきものなるに、権八少しの貯録たまはなけれど、よろづの費か小紫こむらが身み一いつに罷かきりて、このごろは懸路こひらに閑せきをすえられて、中宿なかやどの敷居しきゆも高たかし。こゝに於て権八ふと邪念崩じやねんきずし、武士窮ぶしきさうするときハ剛盜ごうとうをもなすべし。われ逆よも世にたつべき身みにもあらず。よし遮ささや莫百年の壽命じみょうも今まづの貧ひんきにハかえがたしと、それより夜よなく辻切つじきりをはじめける。されバこゝの御術はいくじゆかしこの委巷わいきょう、罪つみなくして道のベの霜しもと消きゆるもの多おほし。長兵衛はやくも此事ことを聞しりて大に憤り、われ俠者けいしゃの魁首けいしゅとなりて升年ねん、終に一トたひも義ぎにそむかず。今権八あくぎやうが悪行あくぎやうによりて、末世まつせにわが名なをくださんことの朽惜くちやくさよと、⁵² ふかくこれを悲かなみける。ある夜権八又市中いちちゆうを徘徊はいはいして、よき財主ざいしゆにも出あへかしと窺くわがへバ、土手節どてぶしの声こゑもとだえたる、日本堤にほんづつのあなたより、懷ふいおもげに來くる人あり。是こそよひの賓ひんなれと、笛袋ふえばくにしこみたる、刀とを抜ぬきつくれば、彼かれの切きりくれば、世人ふたんちみたちと抜合ぬきあはせ、二三合まふうたゝかひしが、権八夜光丸やくわうまるの光ひりにつきて、そ

の人をよく見れば、是幡隨長兵衛也。こハいかにと打驚き、刀を引て逃んとするを、長兵衛その天蓋を摑て動せず、声をあらゝげていへらく、犬猫にも劣りし汝に、いふ」【挿絵十二】「53」べきことなしといへども、思ふ仔細あれバわれと共に来るべしと、相伴ひて花川戸に立かへり、かれが悪行一五一十言ならべ、われ書籍をよまざれバ、和漢の例ハしらざれども、むかし袴垂の平井保輔、洛中を横行して、兄保昌を害せんとせしと、今宵の事よく似たり。とても小紫といふ妖狐に魅られたれバ、昔の権八にハあらじ。とく／＼此地を立去べし。もし一チ日も足をとゝめバ、是までの因みに捕とりて、知縣へ引べきぞと、或ハ怒り或ハかなしみ、忽地これを追出⁵⁴ぬ。権八は身の悞にかへす言もなく、すぐ／＼と立出しが、詰と思ひ翻して、直に三浦が許にしのび行夜に紛れて樓上に登り、小紫にわが身の悪事を懺悔して、今ハこの地のすまひかなはず、翌ハ遠国に赴なり。縁あらバ又あふこともあるべしと、世にこゝろ細く聞ゆ。小紫ハ只管涙にかきくれて居たりしがこの言を聞いてやゝ顔をあげ、こハ情なきことを宣ふものかな。産は生死の際とかや。君にわかれてなど一チ日もながらふべき。あくがれて死んより、此所にてわらは」をころし、こゝろよく立退給へよと、声をもたてず哭きける。権八ハその脊を撫ながら、さあらんと思ひしが、しばし心を試せしそや。われ血氣の勇に誇り、父祖の名を穢すのみならず、幡隨ぬしの恩義を忘れ、悪報既に身に迫り、はじめて夢の寤たる如くふかく心に慙愧せり。いかでか御身ひとり殺ん。こよひこの家をのがれ出、同じ街に死すべしと、いひつゝ泪をおし拭へバ、小紫世に嬉しげに手をあはせ、われ故に、汚名を残し給へるのみか、盛もまたで朝兒の、はか⁵⁵なきたねは宿せども、共に消ゆく露の身の、あさちが夢となることハ、そもそも是いかなる因果ぞと、くどき立てよゝと泣心よはくてかなはじと、権八かたへの鉤子引よせ、一椀かたふけてこれを小紫に与ていへらく、御身かねてハ下戸にして、一滴の酒も飲まずといへども、これぞ此世の名ごりなる。最期の盃うけ給へと、なみ／＼酌で前におく。小紫ハ辞するに及ず、押いたゞきて飲竭バ、怪しや小紫が額に三日月形の金瘡忽然とあらはれたり。権八打おどろきてそのゆゑをとへバ、小むらさきいへらく、さればとよ、是にこそ昔がたりの侍れ。わらは幼き時、しばらく平井の郷士に養れしが、その家の児となかあしく、ある時破魔箭にて額を射られたり。そのゝちわらはは実の親の許にかへりしが、父大病

に打ふしてせんすべなく、九才の春、此里にうられ來しより家信なく、今に父の生死をしらず。しかるに人となりて後も酒を飲ときハ、斯のとく額にその矢疵あらはる。妓女は色をもておもてとする者なれば、是をおそれて酒を飲ず。今ハの盃辭しがたく、飲バ忽地はづかしや、かゝる貌を見せ奉りしと、手⁵⁶して額をうち覆ふ。權八備細を聞いてますく驚き、しからハ御身が父ハ西村保平とハいはざりしや。こハ何としてわが父の名をしり給ひしと、小紫もうたがひ感ひ。權八掌^{たまつら}をうちていへらく、御身とわれハ二世の悪縁也。われこそ御身が額に傷しその時の小兒なれ。かねて父母の物かたりに聞るハ、目黒の郷士西村何がしが女兒をやしなひ、これを汝に妻せんと思ひしが、そのなか陸しからぬをうたがひ、平井觀喜天の菴主にうらりのくつわむしと、声妙にうたふたり。一人ハわが身のうらかたよと、心をこゝろにうなづき合、人定るをうかゞひて、欄間をやぶり帶を降、これに携て外面に下たちつ。小紫に天蓋載て梵論に扮せ、からうじてのがれ出、淺茅が原へ走り行。時ハ⁵⁸十一月廿九日、霰はじりに降雪のあやめもわかぬくらぎ夜を、そこはかなくたどりつき、出茶屋の軒に雪を凌ぎ既に最期の準備をなす所に、忽地囂々と人声聞えければ、權八後面をかへりみていへらく、さればこそ廓の追人の來りつけ。われまづかれらを追しりぞけ、心しづかに死すべしと、小紫を茶店の簷下にのこし置、元きしみちに引かへす。

妻を棄妓を携て暗に禍に遇事
第七編
附両噴石を合して比翼と名る叟

こゝに又本所助市ハ、千住の町に僑居して、權八が在處をたづねけれども、更にゆくゑをしらず。いたづらに月日を過すうち、おつま久しく病て枕あがらず。これを見ころしにせんも便なし。しばらく右内にあづけおき、身を軽して仇人をたづねんとハ思ひながら、さすが宿志を遂ずして、白骨に故郷に帰んこと面目なけれハ、この日夜の更るをまちてお妻を負つゝ、平井村

と心ざし、これも淺茅が原へ來かゝりしが、路を急ぎて中途に懷包をとり落しければ、おつまを出茶屋の簷下におろし置、五六」⁵⁹ 町立もどりしに、頻りに胸打さはげバ、おつまが事きづかはしく、又忙しく馳かへりけるが、白雪路徑を埋みて老馬のしるべにあらざれバ東西もわかつがたく、忽地茶店をとりちがへ、隣の軒端に居たりける小紫をお妻也と思ひ、これを脊おひてはしり行。小紫も又助市を権八なりとし、追人の近づかんことの怕しさに、言もかはざず負れ行ぬ。権八へかゝることもしらずして、追人を切はらひ、元の茶店に立かへり、小紫を尋れどもいらへなく、只隣の簷下に女のうめく声す。扱ハ待かねてはやましし⁶⁰ かとこゝろ慌、声をしるべに探より、夜光丸を引抜て、脇のあたりをさし通せバ、刀の光四面をてらし、瀆る血は雪にながれて鷺管山の紫霜にひとし。権八刀の光明にて、はじめてその人を見れば、刺殺せしハ小紫にあらず、妹おつまなりければ、こへいかに「と」打驚き、惱然として立たる所に、追人近づきぬと見えて、権八をのがすなどいふ声耳をつらぬけば、ぜひなく妹が首を打ち落し、袖引ちぎりて押つゝみ、遂にその場を立去けり。扱亦本所助市ハ、小紫を負て路十町ばかり來りし時、俄に⁶¹ 60 挑灯星のごとくきらめき出、大勢四方よりとり囲み、小紫をわたせくと呼びける。助市更にその故をしらねバ、路をもとめて走んとす。小紫ハ挑灯の火かげにてその人の模様を見るに、負來し人ハ権八にあらざるゆゑ、こハあさましと轉びおつれバ、助市もはじめて彼が面貌を見て大におどろき、縁故を問んとするとき、手ごとに棒をふり揚來つてうち倒んとす⁶² 助市ぜひなく刀を引抜、多勢を相手に闘しが、忽地こゝろ附ておもへらく、われ大望ある身の、人たがひにて「一命をうし」なはんこと本意にあらず。早く逃去んにハと、敢戰を好ず、透をうかゞひてはしらんと思へども、追人ひまもなく撃てかゝれバ、終に身をおどらせて三谷川に飛入しが、水にや溺けん、むかひの岸にやあがりけん、その生死をしらず。世のの人権八が為にかへり討になりしといひ傳へしハ、おつまがことと聞誤しもの歟。追人ハ小紫をとり復しぬるうへハ渠に用なしと、みなく嫖院に帰りける。小紫が心の中警るにものならねど、惣に擒となりて耻をさらさんも朽をしと、それより目黒一朗菴にはしり行、菴主にわが身の俄悔して、本末をものかたり、妹お妻が首と一張の短冊をとり出していへらく、わが

死後本所助市といふものたづね來らバ、これを遁与給はるへし。この短冊haiぬる年、助市がお妻へおりしところの古哥なり。そのうたに、

武藏野にありといふなる逃水の逃かくれば世を過すかな

つら〜この哥のこゝろを考へ、われ助太夫を討て逃かくれ、末世に悪名を残すのみならず、同胞の女才を殺す。」【挿絵十四】⁶² 天罰一首の和歌にこもれり。只潔よく自殺して、

助市がうらみを果すべしといふ。一朗菴ハはじめて権八が素生を聞いて大に驚き、さては御身ハ

平井氏の子息にてありけるか。われも平井にゆかりある、西村保平がなれるはて也。又御身

がふかくいひかはせし小紫こそ、わが女児のおきじなれといふ。権八これを聞いてふたゝびそ

の奇縁を感悟し、すなはち小紫に一通を書残し、肚かき切て死たりけり。小紫ハこのことを傳

へ聞てます／＼悲み寝食をたちて死んとす。長兵衛も是をよそに見るに忍ず、⁶³ 三浦のある

じに備由を告て小紫をもらはんといふ。三浦もかれらが切なるこゝろねをあはれみ、敢利慾

に耽らず、戻儀なくいとまとらせぬ。長兵衛ハさまぐ／＼小紫に教訓し、せめて身一ツになりて

後、尼法師ともさまをかへ、なき人の跡を吊んこそ道なれといふに、小紫も彼が志のあつき

に固辞がたく、しばらくその死をとゞまりしが、けふハ亡夫の初月忌なれば墓参りしたきよ

しを請ふ。長兵衛すなはち人をつけて目黒へつかはしける。一朗庵ありしこども物がたり、

ふたゝび親子の名告して、権八が書おきをわた」【挿絵十五】⁶⁴ しければ、小紫は只管千行

の涙にかきくれ、その夜すがら仏前に通夜せしが、いつの間にや走出けん。権八が墓の前に

て、自刃してぞうせたりける。一朗庵なく／＼その亡殻を権八が墓にならべ葬りて、石のしる

しを残したる。目黒の比翼塚是なり。いかなればこれを比翼塚といふぞとなれバ、はじめハ

二ツの石塔婆、その間一二三尺隔りしが、一夕雌雄の雉子、塚の上に飛來りて、啼声いとかな

し。次の朝これを見れば、夜のうちに両墳石を合して、その間毫髪も容がたし。されば衛侯

の女斎太子の死を悲み夫婦二ツの雉となりし例にならひ、世人はこれを比翼塚とよべり。又

おつまが首級を袖とゝもに埋し地を、袖が崎と名づくとかや。そのうち平井右内ハ子供等が

凶音を聞傳へ、忽地髻おしきて、清淨の行者となり、目黒に來りて一朗庵とゝもに住はてけ

る。その庵を締しところを。行人坂と呼なせり。夫天綱ハ疎にしてもらさず、前車の覆を見

て、後車の戒とするときハ、夫婦和合し、児孫孝順に帰す。讀者勸懲とせバ、富貴榮達疑がひなし。

小説比翼文下巻畢」

65終

曲亭主人新編蓑笠雨談
月氷奇縁
繪入五冊
全編同三冊
繪入
曲亭傳奇花釵兒
きよくていんきはなかんざし
入
小説比翼文
中本一冊
中本二冊
入

享和四年歲宿甲子正月吉日兌行

江戸本町條通油町
僕鶴堂 鶴屋喜右衛門梓」